～つながる県南　広がる実践　すべては子どもたちのために～

県南教育事務所
教育情報

南風 nanpu

令和４年10月12日（水）
No. ５ 【 通巻 第188号 】
文責：教務部指導班

～岩手だからこそできる教育　やるべき教育～　いわての復興教育

約11年前の平成23年３月11日。この日、想定を超える自然の力が、尊い命とかけがえのない幸せを奪っていきました。全県土を包んだ大きな悲しみ、光の見えない不安は忘れることができません。しかし、少しずつではあっても前進し、その悲しみを、「新たな可能性」へと変えていくことが、私たちの大きな使命であります。「いわての復興教育」は、東日本大震災津波で学んだ教訓を学校教育の中に生かし、力強く生きていく子どもの育成をねらいとしています。子どもたちが、自らの生き方・在り方を考え、夢と未来を拓き、社会を創造することができるように、県内全ての学校で取り組むことに大きな意義があります。

管内復興教育研修会

令和４年９月７日（水）に東山地域交流センターにおいて『管内復興教育研修会』を行いました。新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、２年間中止となり、３年ぶりの開催となりました。講義「いわての復興教育の充実について」、「実践交流」、講話「これから求められる復興教育の在り方」を通して、「いわての復興教育」の理念等を確認し、今後の復興教育の在り方を考える機会となりました。

講話「これから求められる復興教育の在り方」

講師：岩手大学教育学部
附属教育実践・学校安全学研究開発センター
准教授　本山　敬祐　氏

これから求められる復興教育の在り方について、防災教育に関する近年の動向や岩手の復興教育の可能性等、幅広い視点からお話いただきました。

これからの社会を担う人材育成をねらいとする復興教育の重要性を再認識する内容でした。

講話から

- 災害の大きさは、自然現象と社会の防災力の掛け合わせで決まる。自然現象を理解するだけの防災教育ではなく、自助、共助、公助のバランスの取れた防災教育が求められる。
- 教員はもちろん、家庭や地域の大人たちを含む社会全体で、広く子どもたちのエージェンシーを育てていくことについて共有していく必要がある。（エージェンシー：変化を起こすために、自分で目標を設定し、振り返り、責任をもって行動する能力）
- 復興教育を広く地域にひらき、地域の実践や人材を活用した組織的な取組を行い、子どもたちに本物の体験を提供することが大切である。

＜参会者の感想＞

〇復興教育というのは未来に向けたものであることを、本山先生の講話から改めて学ぶことができました。児童に自分のよさ、地域のよさを気づかせ、好きになって、将来の自分や地域に期待がもてるようにしたいです。

〇沿岸部だけの復興教育ではなく、内陸部の「受け入れる」というサポーターとしての復興教育の内容が心に残りました。内陸部だからできないのではなく、何があったのかを伝えていくこと、被災した人の思いを想像することが、復興につながっていくことの理解が深まりました。

講義「いわての復興教育の充実について」

講師：岩手県教育委員会事務局　学校教育室
産業・復興担当
主任指導主事　桂　康博　氏

「いわての復興教育」の理念や定義、学校経営への位置付け、副読本の活用方法等についての理解を深めました。

「いわての復興教育」が目指すものは郷土を愛し、その復興・発展を支える「ひとづくり」ということを再確認し、３つの教育的価値「いきる・かかわる・そなえる」を具現化するための方策を学ぶことができました。

＜参会者の感想＞

〇子どもたちも地域の一員として、社会をよりよくしていく意識をもつことが、何か起きた時や他の災害を支える側になった時に生かされると分かりました。実感を伴う活動を取り入れていきたいです。

〇復興教育の内容を整理でき、地域に目を向けながら郷土を支える生徒の育成を目指していきたいと思いました。学校でもう一度、目指す理念を共有していきたいです。

実践交流「各校における復興教育の推進」

震災の教訓を継承する取組や副読本の活用方法について、実践交流を行いました。他校の実践事例を参考にし、自校の取組を見直す機会となりました。

＜参会者の感想＞

〇本校の取組を改めて考えていかなければならないと感じました。ヒントをたくさんいただきました。

〇小・中学校の特色ある実践を知ることができましたので伝講します。